

# 被災人々の10年追つた映画

生まれつき耳の聞こえない映画監督の今村彩子さん(41)が、東日本大震災などで被災した人らを追つたドキュメンタリー映画「きこえなかったあの日」が27日から公開される。困難のなかで前へ進むるう者の姿を通じて問いかけるものとは。

2011年3月11日。あの日、今村さんは愛知県で仕事の打ち合わせをしていた。揺れを感じ、テレビをつけると静かな海。字幕はなく、何が起きたのかわからなかつた。後になって、津波の前の映像だつたと知つた。

11日後、カメラを手に宮城へ。避難所で孤立したり避難を呼びかける放送が聞こえなかつたりした人たちを記録した映画「架け橋 きこえなか

## 命に関わる災害情報

### 聞こえぬ格差越えて

「3・11」を13年に発表した後も「命に関わる情報に格差があつてはいけない」という思いで東北やその後の災害の被災地などを撮り続けた。16年の熊本地震の避難所では、手話通訳を依頼できるようになっていた。西日本豪雨(18年)の際は災害ボランティアをするひょう者の姿があった。コロナ禍の中、愛知県では、ろう者らと薬剤師会が、コミュニケーションをとるために薬の絵カードを作つていった。

約10年間のこうした変化と、感じた希望を込めて作ったのが「きこえなかったあの日」だ。

「被災ろう者」としてだけではなく、一人の人間としての輝きにも目を向けた。震災の年に宮城県亘理町の仮設住宅で出会つた当時66歳の加藤豊<sup>（よし）</sup>さんは、読み書きが苦手で手話も周囲には通じない。だが住民と笑顔を交わし、手を振り、顔見知りをつくつていた。「ろう者は『助けてもらひう人』で、読み書きが厳しい高齢のろう者は『コミュニケーションが難しい。そんな刷り込みに気づかされた』と今村さん。「人と人が心を通り合わせる喜びが出発点になり、知恵と工夫でコミュニケーションの壁や情報の格差を乗り越えていけると思うんです」



右映画の一場面。支援者と笑顔を交わす加藤豊  
男さん（右）©2021 Studio AYA  
左インタビューに答える今村彩子さん＝東京都

27日から東京・新宿のK's cinemaなど全国で順次公開されるほか、ネットでも有料配信する。詳細は公式サイト (<http://studioaya-movie.com/anohi/>)。問合せは「カーデ（090-6187-7110）。

（森本美紀）